

令和2年度

## 本庄市の遺跡 最新出土品展

今年度発掘調査を実施した児玉町蛭川の辻堂遺跡F地点から出土した土器・石製品を中心に、宇留井山遺跡（児玉町高柳） 竪穴住居跡内および元富東古墳（東富田）石室内出土の出土炭化材等自然科学分析結果などを展示します



辻堂遺跡 F 地点

本庄市には500箇所を超える埋蔵文化財包蔵地が存在し、毎年発掘調査が行われています。発掘調査は、学術目的のほか、開発に伴い消滅してしまう遺跡を写真や図面に記録し後世へと伝えるために実施されるもので、市の歴史を語るうえで欠くことのできない貴重な資料が発見されています。

最新出土品展では、市内で実施された発掘調査の成果をいち早く公開しています。

### 第Ⅰ期

会場 本庄早稲田の杜ミュージアム  
交流ひろば

会期 令和3年 1 月 5 日（火）  
～ 2 月 28 日（日）

休館日 月曜日  
※1月11日は開館し、  
12日を休館とする

開館時間 午前9時00分  
～ 午後4時30分

### 第Ⅱ期

会場 文化財整理室  
文化財展示コーナー

（児玉総合支所第2庁舎2階）

会期 令和3年 3 月 2 日（火）  
～ 3 月 26 日（金）

休館日 土曜日・日曜日・祝日

開館時間 午前9時00分  
～ 午後4時30分

# 辻堂遺跡 F 地点

つじどういせき

調査区内からは、古墳時代中期の竪穴住居跡3軒と、古墳時代中期～後期の多種多様な土師器などが発見されました。

辻堂遺跡は、本庄市児玉町蛭川に所在する古墳時代中期～後期(5～7世紀中頃)を中心とする遺跡です。今回の発掘調査は、令和2年夏に個人住宅建設に先立って、やむを得ず失われる遺跡を、記録という形で後世に残すために実施されました。

## 第61号住居跡のカマド

調査の初期にカマドの煙出し(煙道)の部分が住居の外に延びていたことから、カマドをもつ住居として認識されていましたが、発掘したところ、カマドは意図的に壊されて失われており、代わりに底を抜いた甕が底を上にして設置されていました。この底部穿孔甕は他の土器の破片や粘土を敷いて固定されており、余りの破片や本来のカマドの部材、燃烧した炭や灰は住居の南壁寄りに寄せてまとめられていました。このような底の部分の抜いた土器や底を上にした土器をカマドに据えるのは、カマド祭祀の事例として広く知られています。本庄地域でのカマドの導入は古墳時代中期頃からはじまりますので、今回の調査で見つかった第61号住居跡のカマドは本庄地域におけるカマド祭祀の最初期の事例の1つとなるかもしれません。



第61号住居跡カマド検出状況

## 第61号住居跡の炭化材

カマドの周辺や実際に使われていた頃の住居の床部分に多量の焼土と炭化した木材が散っている様子が確認されました。炭化した木材は、カマド前に据えられた甕の上にも乗っており、落下したようにも見受けられます。これらの状況は、この住居が火災に遭ったことを示しており、何らかの原因で住居が燃え、天井部分やカマドの周辺に組まれていたであろう住居の部材が燃えて落下したものと考えられます。カマドの祭祀は住居の使用を終えた段階で行われていると考えられていますので、住居として役目を終えた後、建物部分は火災に遭い、焼け落ちてしまったようです。

### 展示品

埴形土器	4点
埴形土器	1点
高坏形土器	4点
台付鉢形土器	1点
ミニチュア形土器	1点
白玉	2点
甕形土器	4点

## 自然科学分析の成果

しぜんかがくぶんせき

元富東古墳出土	押花標本	4点
木材	種子等標本	7点
鷓目留金具	参考品(羽根つき羽 一式)	



### 元富東古墳出土の木材

もととみひがしこふん (東富田)

元富東古墳は、古墳時代後期(7世紀前半)に築造と考えられ、横穴式石室を有し、埴輪は伴わないものと考えられます。今回分析した資料は、石室奥の右側の壁寄りから、銅製の鷓目留金具と共に出土していることから、直刀の柄頭の部材と考えられるもので、モッコク科サカキであることが判明しました。



### 宇留井山遺跡出土の炭化材

うりやま (児玉町高柳)

分析の対象となった炭化材3点は、第21号竪穴住居跡北西コーナー寄りの床面付近から、散在した状態で検出されました。3点のうち1点は、カバノキ科クマシデ属クマシデ節、他の2点はムクロジ科ムクロジであることが判明しました。

## 山古墳群 塚原地区 C 地点

あきやまこふんぐんつかはらちく

### 展示品

弥生土器片 23点

## 弥生土器

展示した資料は、2・3号住居跡とした弥生時代の住居跡およびそれらを切る古墳時代の住居跡の覆土中から出土した土器片です。条痕文の甕および、沈線や縄文の施された甕と報告しましたが、沈線文のみ施された土器片は、総じて薄手であり、浅鉢などの器種になるものが含まれる可能性があります。沈線文は、著しく崩れていますが、変形工字文や三角連繋文の一種でしょう。文様の特徴などから、出土土器にはある程度時間幅が見られるものの、おおむね弥生時代前期末葉から中期前葉に収まるものと思われます。それらの土器片のみ出土した第2・3号住居跡は、同時期の住居跡と考えられます。